聴覚障害者史もしくは聾史のための覚え書

京都大学　　松延秀一

一つのエピソードからはじめよう。平泉澄（ひらいずみ・きよし）という、東京帝国大学教授で皇国史観信奉者の発言である。ある学生と卒論のテーマについて話し合っていた時のことである。学生に反問して「百姓に歴史がありますか」「豚に歴史がありますか」と発言したと言うことである。昭和の初め頃のことという（阿部猛「太平洋戦争と歴史学」（吉川弘文館, 1999, p.41）。

今日から見ると、平泉発言は、百姓つまり農民や民衆もまた歴史を動かしたことをあえて無視した、ということになる。百姓一揆や自由民権は歴史の動因ではなく研究対象にならない、というわけである。皇国史観というものが、日本は天皇を中心とする神の国だとする荒唐無稽な観念の産物であって、民衆の主体性を無視しているからである。文部科学省の教科書検定にもこうした歴史の見方が伏在している（扶桑社の歴史教科書の問題を見よ）。この平泉発言の「百姓」「豚」を「障害者」や「聾者」に置き換えるならば、相当な差別発言になろう。「聾者に歴史はない」のと同じことだからであり、これはこの学会の存在理由を否定するに等しい。だが、こうした考え方はまだ根強く残っているかもしれない。

しかし、現代という時代は、障害者もまた歴史を動かす民衆の一員であることを示している。例えば、種々の法律改正要求運動（民法 11 条改正要求や欠格条項撤廃要求）を挙げることができよう。その要求運動の積み重ねが国会を動かし、法律改正を実現させた。その過程はそれ自体一つの歴史であるが、その過程を現在の視点から追究して再評価することも一つの歴史研究であるといえるだろう。

ところで、歴史の研究を進めるにあたっては、過去の学界動向について心得ておく必要があるだろう。ここでは、極端に単純化して述べることとする。

1945 年、つまりアジア太平洋戦争敗戦以降形成された「戦後歴史学」は、上述の皇国史観への反省の上で科学としての歴史学を推し進め、戦後民主主義の知的基盤を形成した。学問の自由、のみならず、思想・言論・表現・出版の自由に支えられ、多くの成果が蓄積された。その上で、1960 年代以降、民衆史、つまり歴史の表舞台に華々しく登場したわけではない普通の人々の歴史を探るという領域が開拓された。特にこの領域では、部落史（被差別部落）、女性史、地方史の研究が進められた。1980 年代以降社会史の研究も始まった。こうした中で、弱者やマイノリテイ（少数者集団）へも注目が集まるようになった。

その傾向の一つとして「障害者の歴史」についても研究が出てくるようになった。先駆的業績を残した人の名を挙げれば、河野勝行、加藤康昭、生瀬克己といった人たちである。その業績には目を通し、方法論等学んでおいた方がよい。この学会の設立もこうした傾向の反映であろう。

それでは、聴覚障害者の歴史（聾史）について参照すべき業績はあるか。この学会のメ

ンバーによってすでに検索されているかもしれない。が、あまり見当たらないように思う。一応、伊藤政雄氏の「歴史の中のろうあ者」（近代出版，1998）が出発点になるということになろう。とは言え、この本は研究論文と言うよりも通史であり、出典表示が不十分なので、後進学徒による検証がむずかしいようである。聾史の場合、その「障害」が目に見えないためか、文字史料が乏しいので、史料的根拠すなわち出典表示は不可欠である。それはともかく、単に過去の事実を発掘するだけでなく、過去を知ることによって現在をもっとよく知り、より良き未来に貢献していくことが歴史研究の究極の目的であり、この学会の存在理由でもあろう。

以下、研究するにあたっての留意点を述べておく。たいていの歴史学入門書には掲載されているが。

(1)どの分野をどんな視点で研究するか。分析視角の設定。

(2)先行業績の検索と精読。

(3)史料の探索。一つは既存史料の読み直し・精読・解釈。古事記や日本書紀もその意味では有効な史料となる。もう一つは文字通りの探索である。前近代は困難だが近現代は期待できる。情報公開制度を使えば公文書の入手は可能である。

(4)事実の発掘と確定。つまり、考証と実証である。確定すれば史実となる。

(5)オーラル・ヒストリー（聞き書きによる歴史）の場合、記憶による証言はそれ自体が一つの史料であって、そのままでは歴史にならず、他の史料との照合による検証が必要である。その意味では、伝記や人物伝、回想録も同様である。

(6)語学力。古文書や外国語の読解力は必要。

(7)論文の書き方の訓練。

(8)図書館の利用。

以上、ご参考になれば幸甚である。

蛇足ながら、当方の経験を述べる。大学院時代、偶然発見された「原敬関係文書」の解読を研究室の先輩と共に行った（後日、日本放送出版協会から出版）。当方の専攻は近代日本政治外交史であった。この分野は外交文書や政治家の書簡・日記などが残されていて、取り付きやすかったこともある。アカデミズムの中にいると、聾史のような文字史料の乏しい分野には手が出にくいようである。

そうだとすると、現時点では聾者自身によるアマチュア的探求による事実の発掘、史料の発掘とその活字化（つまり史料集の出版）の積み重ねが必要となろう。この学会でも、史料集の出版という事業が考えられよう。